

疲れた昼

僕は橋にたどりつくと  
がっかりして……  
ふるさとへ帰つた思ひで  
まはりを見廻すのだつた  
流れはみかんの皮をうかべ  
木切れを  
ひたひたとうかべてゐるのだつた  
赤いくちばしで真面目な顔して  
かもめはゆつたりと  
河の面を飛んでゐた  
同じ波を  
同じ憂鬱を  
僕は見てゐた  
蒸気船は遠くを行き来してゐるが  
それも数少い  
対岸のクレーンは  
のびたままで動かない  
煙突は煙を忘れ  
倉庫はコンクリートの肌をさらしてゐた  
小波が立ち  
ちらちらと虫針をこぼしたやうに光つてゐた  
かもめは魚をとらへるために  
すうつと下りて  
しづかな空気を乱した  
倉庫のコンクリートの肌を見てみると  
その一つの窓に  
消し忘れたはだか電球がゆれていた  
それが魔法の国のやうに不思議に見えた  
現実には  
ただ かもめがゐただけだつた